

茂田井武の欧州放浪

執筆者：上島史子

掲載誌：「大川美術館ニュース ガス燈 第148号」
(公益財団法人 大川美術館)

欧州滞在中の3冊の画帳

茂田井武(1908-1956)は、1930年、21歳の時にパリを訪れた。《ton paris》(大川美術館所蔵)は、その滞在中に描かれた画帳である。お金も持たずにパリに着いた茂田井は、翌日から17区のデパルカデール通りにあった日本人クラブで皿洗い兼給仕として働き始めた。《ton paris》には目に触れるもの全てが新鮮な、20代の若者の感性がとらえたパリの街が描かれている。

茂田井が子どもの頃の美術教育は臨画が中心だったが、中学生になるとそれでは飽き足らず、好きな絵を描くようになった。その頃に「海外の新興美術の紹介が次々と、未来派、表現派、立体派、野獣派という形の大津波となって押し寄せてきて私達はそれに巻かれてフラフラになった」*1という。1920年代のパリは、芸術の都として世界中の画家たちが憧れ、集った街だった。中学卒業後、美大の受験に失敗した茂田井は、居場所を見つけられないまま、写生旅行と称して靴ひとつでパリへ向けて旅立った。

パリに渡っても、茂田井に他の画家たちとの交流の記録はほとんどない。給仕などをして働きながら安酒場で酒を飲み、休みの日にはルナ・パークやグラン・ギニョールの怪奇劇、メドラノ・サーカスに出かけ、切り抜き紙芝居をつくって子どもたちを喜ばせるなど、街での生活にとけ込んでいった。茂田井にとっての絵の勉強は、仕事を終えてアパートに帰ってから、夜な夜な記憶を頼りに、絵日記のように小さな画帳に絵を描きためていく、というものだった。ヨーロッパ滞在中のおよそ3年の間に描かれた画帳が何冊になったのかははっきりしないが、《ton paris》のほかに2冊の画帳が現存する。

《Paris の破片》は、パリでの私生活を描いた日記風の画帳だ。モンパルナスのデュトー街にあったアパートのようすや、パリで関わった女性たちの姿、茂田

井自身の姿もたびたび描かれている。この画帳は1933年にパリに別れを告げてアントワープに発つ場面で終わる。

1932年1月から8月頃まで、茂田井はジュネーブに長期出張し、その後も翌年春までパリと行き来していた。《続・白い十字架》はスイスに滞在した日々の情景を描いた画帳だ。レマン湖畔の陽光あふれる風景や、子どもたちの姿などが描かれている。茂田井がジュネーブにいた時期は、国際連盟の本部があったこの街で、軍縮会議が行われた時期に重なる。第一次世界大戦の反省から設立した国際連盟だったが、1933年には日本とドイツが脱退し、再び世界が戦争へ向かうのを止めることができなかった。この画帳の最後には、戦争で傷ついた兵士の姿が描かれている。



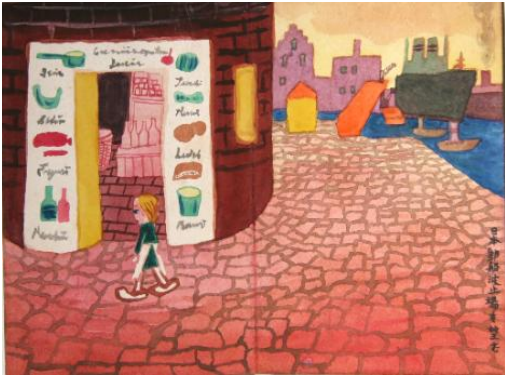
茂田井武 画帳《Paris の破片》より 1930年頃～35年頃
ちひろ美術館蔵

印象のレンズ

ヨーロッパの旅から戻って10年後、第二次世界大戦中の1943年から44年にかけて、茂田井は旅の記憶を小さな折本の画帳《古い旅の絵本》に描いた。この画帳を贈られた方は、外套に画帳専用の内ポケットを縫いつけ、空襲のときにはその中へ入れて避難したという。折本の片面には、福岡から京城(現・ソウル)へと渡り、ハルピンを経てシベリア鉄道に乗り、モスクワ、ワルシャワ、ベルリン、ケルンなどの街に立ち寄りながらパリに至る行程を見ることができる。裏面にはジュネーブとアントワープに続き、ロンドンから日本行きの船に乗せられ、マルセイユ、ナポリ、ポートサイド、スエズと帰路で目にした風景が描かれている。

茂田井は「印象のレンズ 私の描きたい絵」*2というエッセイのなかで、描きたい絵について「記憶にひっかかってぬけないもの、過去の印象の鮮明なもの」と

語っている。脳中の印画を紙に焼き付けるように一枚一枚と描き続けていくうちに、思い出の映像は濃度を増して、「その時そのままの不死の姿」に近いものになっていくという。旅先で描いた画帳の多くは戦災で消失したが、記憶の中の光景は濃縮されてこの画帳に描き出されている。



茂田井武 画帳《古い旅の絵本》より 1943～44年
ちひろ美術館蔵

子どもの本の画家として

1944年に召集されて中国に渡った茂田井は、北京で終戦を迎え、1946年1月に焼け野原となった東京に復員した。その後、茂田井はあふれるような勢いで自由に絵を描き始めた。旅で見た光景や童話の一場面、おもちゃやわが子の姿などを描いては三畳間の壁に貼ったといい、四隅に画鋏の跡が残る絵が数多く残されている。この時期に描かれたものに《幼年画集》と題した3冊の未完の折本がある。1910年、満2歳のときに物干し台で乳母に抱えられてハレー彗星を見た記憶や、布団部屋でかくれんぼをする幼い自分の姿などが描かれている。茂田井は日本橋の大きな旅館の次男だった。15歳のときに生家は関東大震災で全焼したが、幼い日の印象は時間を経ても色褪せなかったことがわかる。画帳が未完で終わったのは、依頼される仕事が多くなりすぎて、自由に絵を描く時間が取れなくなったからだろう。

茂田井が子どもの本で活躍したのは、主に1946年から亡くなる1956年までの10年間、日本が敗戦の混乱にあった時代だった。軍国主義のなかで、子どもの本は戦意高揚の道具として利用された。戦争が終わって民主主義の時代になると、子どもに文化を届けたいと願う大人たちが、良心的な雑誌の創刊や児童書の出版に乗り出し、子どもの本は飛ぶように

売れたという。粗悪な仙花紙に印刷され、子どもたちをいっとき楽しませたら消えてしまうそうした本に、茂田井は身を削るようにして絵を描いた。

1956年、亡くなる半年前に「こどものとも」の2号として出版された『セロひきのゴーシュ』は、今も版を重ねている*3。当時茂田井は病床にあって筆を取るのもままならない状態だったというのが、宮沢賢治の童話と響き合う、ユーモアと素朴な詩情に満ちた絵を描き上げた。日本の絵本の文化がまさにこれから花開こうとする時期、この絵本が後に続く画家たちに与えた影響は大きい。



茂田井武 絵本『セロひきのゴーシュ』(福音館書店)表紙原画 1956年
ちひろ美術館蔵

2009年、ちひろ美術館では、茂田井武のご遺族が大切に守ってきた作品の寄贈を受けた。作品の保存とともに、その画業を広く後世まで伝えるべく、今後も努めていきたい。

注記

*1・2 茂田井武『印象のレンズ 私の描きたい絵』「教育美術」1952年5月号 教育美術振興会

*3『セロひきのゴーシュ』宮沢賢治・原作 佐藤義美・案 茂田井武・画「こどものとも」1956年5月号 福音館書店（改訂版『セロひきのゴーシュ』宮沢賢治・作 茂田井武・画 1966年 福音館書店）